



AI Chat Generator



Quisque vel commodo nisi,
gravida bibendum nunc.
Praesent scelerisque ...



Vestibulum hendrerit mauris
ligula, pulvinar gravida e
molestie cursus. Donec



Quisque id feugiat ege
scelerisque



Aliquam sit amet
ex id, laoreet lacinia dui.
Vivamus interdum ...



Setting



Log out



Quisque vel commodo
Praesent scelerisque h



Phasellus egestas vi
Curabitur in viverra
vestibulum molestie

Fusce vulputate bib
feugiat. Sed quam
lales eros. Mauris

Donec varius ullam
enim eget molestie



Vestibulum hend
Vivamus vehicula



Aenean at veli
sagittis. Etiam a
posuere risus vi

• Sed quis lore
nibh, vitae fauc
sit amet feugia

• Nulla pellen
efficitur rhonc

• Fusce place
feugiat sem c

生成AI

～世界市場の現状と将来展望～

Sample



目次

はじめに

I. 市場の定義	4
II. 市場動向	6
III. 市場規模・予測	11
IV. マーケティング	11
V. 参入企業動向	13
VI. 業界構造	16
VII. 課題	18
VIII. 日本市場の動向	21

はじめに

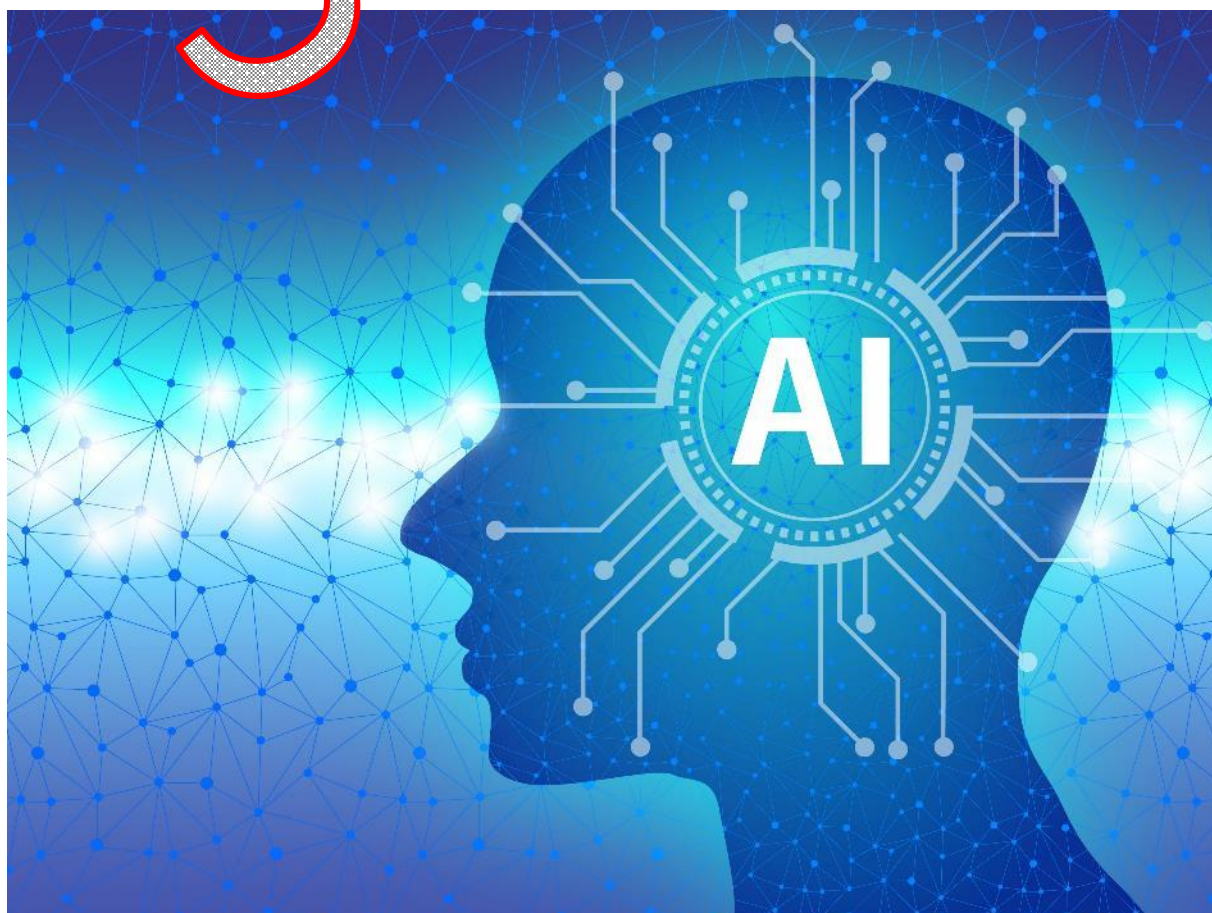
生成AI(Generative AI)は、2022年末以降、短期間のうちに社会実装が進んだ先端技術の一つであり、企業活動や産業構造に広範な影響を及ぼしつつある。テキストや画像の生成にとどまらず、業務効率化や付加価値創出の手段として活用が拡大しており、生成AIは単なる技術トレンドを超えた基盤的な市場として形成されつつある。

一方で、本市場は成長速度が極めて速く、基盤モデル、クラウドプラットフォーム、アプリケーション、インフラといった複数のレイヤーが複雑に結び付くことで、市場の範囲や競争構造が急激に変化している。特定の事業者や技術要素に影響力が集中する一方、下流で様々な用途の競争が進んでおり、こうした多層的かつ非対称な構造を踏まえた整理が不可欠である。

本レポートは、生成AI市場のうち、汎用的に利用可能な基盤モデルおよびそれを外部に提供するプラットフォーム市場に焦点を当て、市場の概要、市場動向、規模、競争環境、業界構造、課題を体系的に整理することを目的とする。

なお、本レポートは、専門調査員による対企業へのインタビュー調査により収集した情報に加え、各種統計情報や企業の公開情報、弊社自有情報に基づき、分析を行っている。

株式会社SVPジャパン
SVP注目市場分析



I. 市場の定義

Sample

汎用的な生成AIの基盤モデル・プラットフォーム市場とは、テキスト、画像、音声、動画、コードなどのコンテンツを生成する能力を持つ大規模言語モデル(LLM)や画像・動画生成モデル等の基盤モデルを開発・提供する企業と、それらのモデルをクラウドAPIやマネージドサービスとして外部に提供するプラットフォーム事業者によって構成される市場を指す。

本レポートでは、こうした汎用的に利用可能な基盤モデルおよびその提供プラットフォームを分析対象とし、特定業界向けに最適化された応用モデル、ローカル環境で稼働する小規模モデル、自律的意思決定を行うAIエージェントなどは対象外とする。

Sample



II. 市場動向

Sample

1.導入・利用動向

生成AI市場は、2022年末の対話型生成AIの一般公開を契機として急速に立ち上がり、企業・行政・個人を問わず利用が広がっている。EUでは、企業におけるAI利用率が年々上昇しており、特に大企業を中心に、文章生成、要約、データ分析支援など生成AIと親和性の高い用途での導入が進展している。

米国においても、企業活動におけるAI活用は着実に拡大しており、製造業や情報通信業を中心に、業務効率化や付加価値創出を目的とした生成AIの活用が進んでいる。日本では、諸外国と比較すると一般利用は限定的であるものの、企業や行政による実証実験や業務での動きが増加傾向にあり、今後の本格展開に向けた準備段階にあると整理できる。

2.技術トレンド

生成AIの技術動向としては、以下の点が特に目覚ましい。

マルチモーダル化の進展	テキストに加え、画像、音声、動画、コードなど複数のデータ形式を統合的に扱うモデルが主流となりつつあり、より複雑で多岐にわたるタスクへの対応が可能となっている。
高機能化・知的能力の向上	長文コンテキスト処理、複雑な推論、コード生成などの能力が強化され、特にソフトウェア開発支援分野では生成AIが主要な生産性向上ツールとして定着しつつある。
業務データとの統合活用	企業内データと生成AIを組み合わせた活用(RAG等)が進み、汎用モデルを業務に適用するための実装技術が重要性を増している。
信頼性・安全性への関心の高まり	誤情報生成や情報漏洩への懸念を背景に、セキュリティ、ガバナンス、評価手法の整備が技術的テーマとして浮上している。

3.投資・研究動向

生成AI市場の急成長を背景に、投資・研究開発の規模も拡大している。生成AI関連ソフトウェアおよびサービス市場は、2022年から2024年にかけて年率100%を超える成長を示しており、短期間で数百億ドル規模へと拡大した。

これに伴い、民間投資も急増している。ベンチャーキャピタル投資は近年大幅に拡大し、特にレイトステージの大型投資が増加している点が特徴である。これは、技術実証段階の企業よりも、一定の収益性や市場支配力を持つ事業者への資金集中が進んでいることを示している。

研究開発面では、大学や研究機関による基礎研究に加え、企業主体によるモデル開発や応用研究が活発化しており、生成AIはAI研究全体の中でも中心的な分野として位置づけられるようになってきている。

Sample



Ⅲ. 市場規模・予測

Sample

1.市場規模の全体像(世界市場)

生成AI市場は、2022年以降の急速な普及を背景に、世界的に極めて高い成長率を示している。複数の市場予測を総合すると、生成AI市場は今後も年率35～45%程度の高成長を維持しながら拡大すると見込まれており、2030年前後には1,000億ドル規模から、予測によっては1兆ドル規模に達する可能性が示されている。

生成AI 市場規模推移(世界市場) 単位:億ドル

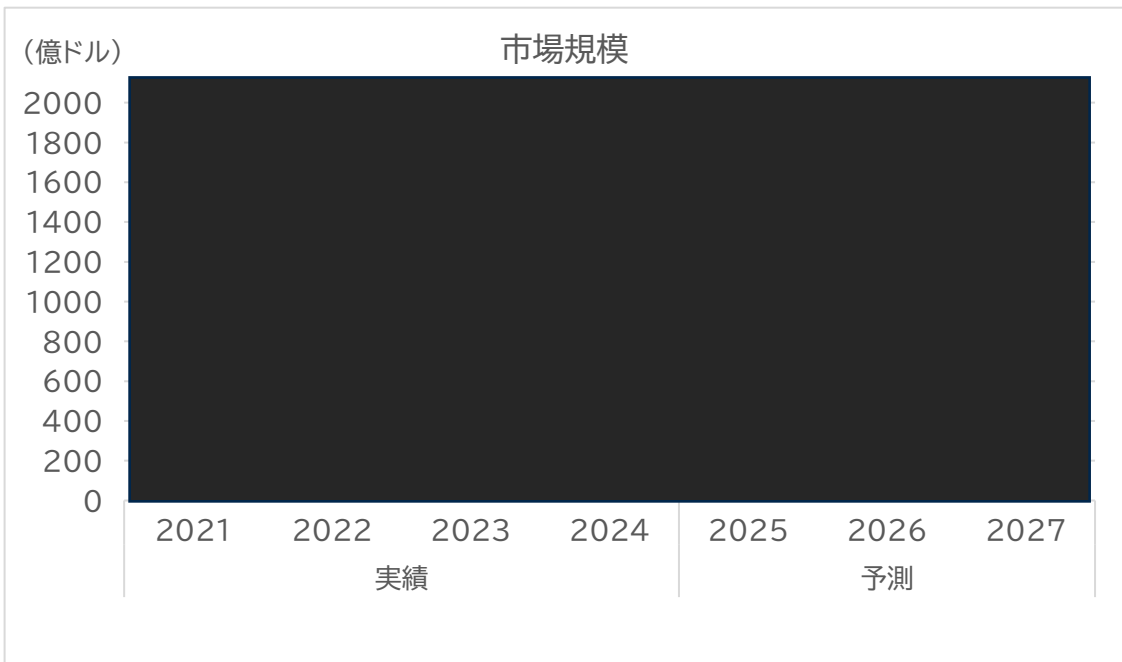
	実績			予測			
	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027
市場規模							
前年比							

※SVPジャパン推定。

2.セグメント別市場動向

技術別に見ると、現在の生成AI市場で、トランスフォーマー型モデルが中核技術として広く採用されており、この傾向は引き続き見込まれている。コンポーネント別では、ソフトウェアおよびサービスが市場の大半を占めており、2024年時点で全体の約6割を構成している。

用途別では、メディア・エンターテインメント分野が現時点で最大の市場を形成しているが、今後はビジネス用途の拡大が市場成長を牽引すると見られる。特に、マーケティングや業務文書作成などのコンテンツ生成領域、ソフトウェア開発支援、業務プロセスの自動化といった分野では、企業導入の進展に伴い市場規模が急速に拡大すると予測されている。



IV. マーケットシェア

Sample

生成AI市場では、用途や提供形態によって競争構造が異なるものの、全体としては主要プレイヤーへの集中が進んでいる点が特徴である。

エンタープライズ分野における基盤モデル(LLM)サービスの利用状況を見ると、2023年末時点では先行して商用展開を進めてきたOpenAIが高い認知度と導入実績を背景に約半数のシェアを占めていた。しかしその後、競争の激化とともにシェアは分散し、2025年時点ではAnthropicを含む複数の主要モデルが拮抗する構図へと移行している。とりわけ、Anthropicは企業向け機能の強化や長文コンテキスト処理能力の向上を背景に急速に存在感を高め、エンタープライズ利用における中心的な地位を獲得した点が、一般的な「OpenAI優位」という心象と異なるポイントである。

この逆転が生じた背景には、いくつかの構造的要因がある。第一に、Anthropicは企業当局からConstitutional AIに代表される安全性・ガバナンス重視の設計を前面に打ち出しており、リスク許容度の低い大企業や規制産業において「説明しやすいモデル」として採用されやすかった。企業側から見ると、純粋な性能差以上に、セキュリティーやコンプライアンス面で「納得感」が重要であり、この点でAnthropicは明確なポジションを確立した。

第二に、ビジネスモデルと販売チャネルの違いがある。OpenAIが消費者向けサービス(ChatGPT)とAPIの両輪で展開してきたのに対し、Anthropicは一貫してB2B・API中心の戦略を取り、AWSやGoogle Cloudとのパートナーシップを結ぶことで既存クラウド契約の延長線上で導入できる環境を整えてきた。これにより、企業のワークフローに適した形でプロダクション導入が進み、結果として企業のLLM支出シェアで上位に立つ状況が生まれた。

プラットフォームおよび売上規模の観点から見ると、生成AI基盤は引き続きクラウド事業者を中心とする寡占的な構造を示している。クラウド上で基盤モデルを提供する事業者が市場の過半を占めており、モデル提供とインフラ提供を一体化した戦略によって、企業顧客の獲得を加速させている。この結果、生成AIの導入は特定のクラウド基盤に集約されやすく、市場全体としては高い集中度を維持している。

基盤層を支えるインフラストラクチャー分野では、データセンター向けGPUを中心とする計算資源市場において事実上の業界標準が確立されており、この構造が生成AI全体の供給能力やコスト構造に大きな影響を与えている。GPU、クラウド、基盤モデルが密接に結び付いた結果、生成AI市場はアプリケーション層では競争が生じつつも、基盤層・インフラ層では強い寡占性を持つ、多層的かつ非対称な競争構造を形成している。

エンタープライズ分野における基盤モデル(LLM) マーケットシェア (2025年・ユーザーベース)

LLM名	シェア
合計	100%

V. 参加企業の動向

Sample

1.主要プレイヤー別の戦略とビジネスモデル

Anthropic

AI安全性研究を起点に設立された生成AIスタートアップで、「Claude」シリーズの大規模言語モデルを企業向けに提供する基盤モデル専門ベンダーである。安全性とコンプライアンスを重視した設計思想を特徴とし、規制対応が求められる金融・公共分野を含む大企業からの支持を拡大している。近年はエンタープライズ利用における存在感を急速に高めており、コード生成、長文ドキュメント処理、業務エージェントといった本番ワークロードへの深い組み込みを通じて、企業向け市場における中核的プレイヤーとしての地位を確立しつつある。

OpenAI

研究組織として発足した後、現在は商用生成AIの代表的プレイヤーとして、B2B基盤とコンシューマー向けサービスの両面で収益化を進めている。大規模言語モデルをAPIとして企業・開発者に提供し、利用量に応じた従量課金を基本とする一方、個人向けにサブスクリプションサービスを展開している。クラウド基盤は特定のパートナーに依存し、エンタープライズ市場の展開では同パートナーとの連携が重要な成長ドライバーとなっている。高品質モデルへのアクセスを事業の中核とすることで、需要拡大に比例したスケール型の成長を実現している。

Google(Google DeepMind)

自社開発の基盤モデルとクラウド基盤を組み合わせた垂直統合型の戦略を取っている。生成AIはクラウドサービスの付加機能として提供されると同時に、自社の検索や業務アプリケーションにも統合されており、プラットフォーム主導権の確保を重視した展開が行われている。

Microsoft

自社で基盤モデルを開発するのではなく、外部モデルとの強固なパートナーシップを軸に、クラウドおよびソフトウェア製品全体へ生成AIを組み込む戦略を採用している。生成AIはクラウド利用拡大と既存製品の付加価値向上の両面で機能しており、企業向け市場では圧倒的な配信力と顧客基盤を活かした展開が特徴である。

Amazon Web Services(AWS)

複数の基盤モデルを選択可能とするマルチモデル対応を特徴とし、企業が用途に応じて柔軟に生成AIを利用できる環境を提供している。強固なクラウド顧客基盤とインフラ投資力を背景に、生成AIをクラウド利用拡大の中核サービスとして位置づけている。

2.収益モデルと価格体系の動向

主要プレイヤーの収益モデルは、API利用料やクラウド利用料を中心とした従量課金制が基本となっている。高性能モデルほど計算コストが高いため、トークン単価や処理量に応じたプレミアム価格が設定される一方、軽量モデルや普及モデルについては価格を抑え、利用拡大を優先する二層的な価格戦略が一般化している。

また、開発者向けには無料枠やクレジットを提供して初期利用を促進し、エンタープライズ顧客に対しては包括契約やボリュームディスカウントを提示するなど、顧客規模や用途に応じた柔軟な価格設計が行われている。市場拡大と競合増加を背景に、価格競争と機能差別化が同時に行われている点が現在の特徴である。

3.戦略的パートナーシップと市場形成

生成AI市場では、基盤モデル開発企業、クラウド事業者、スタートアップ間の戦略的パートナーシップが重要な役割を果たしている。モデル提供、インフラ提供を企業間で組み合わせることで、巨額投資リスクを分散しつつ、迅速な市場展開を可能にしている。

近年は、クラウド事業者が特定のモデル開発企業と強固な関係を築き、そのモデルを自社基盤の中核として提供する動きが顕著である。一方、オープンモデルを軸としたエコシステムも並行して発展しており、クラウド事業者とオープンモデルが共存する構造が形成されている。こうした提携関係は、市場シェアや競争優位性を左右する要素として、今後も重要性を増していくと考えられる。

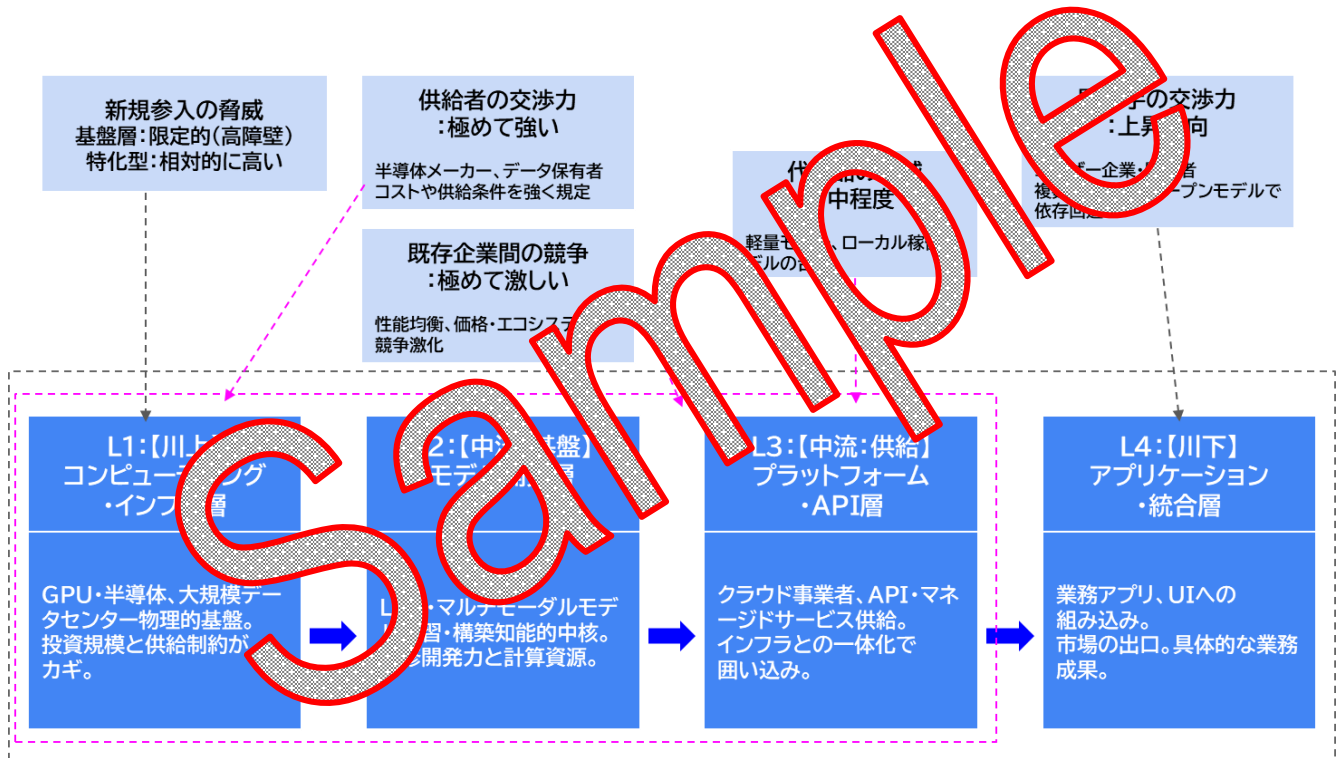


VI. 業 務 構 造

Sample

生成AI市場は、膨大な計算資源とデータを必要とする上流から、顧客接点を担う下流まで、垂直統合と水平分業が併存する多層的な構造を有している。特に、インフラ・クラウドを握る事業者の影響力が強く、市場全体の競争環境を規定する要因となっている。

生成AIの市場構造



本市場の構造的特徴は、「上流のインフラを押さえる事業者が、中流のモデル・提供層に対しても優位性を持つ」という非対称性にある。クラウド事業者は、供給者であると同時に競合者でもあり、この二重の立場が純粋なモデル開発企業との間に構造的な依存関係を生み出している。

一方で、モデル自体はオープンソース化の進展によりコモディティー化が進む傾向にあるのに対し、それを支える計算資源や配信基盤は集中が進むという、ねじれた競争構造が形成されている。この非対称性こそが、生成AI市場における競争と成長の両面を規定する重要な要因となっている。

Ⅶ. 課題

Sample

生成AI市場は急速な拡大を遂げた一方で、持続可能な成長と実社会への定着に向けて、経済・技術・制度・社会の各側面において複合的な課題に直面している。以下では、本市場の構造と前章までの分析を踏まえ、主要な課題を整理する。

1. 経済的・構造的課題

生成AIの高度化は、同時にコスト構造の複雑化と収益性への圧力をもたらしている。

第一に、推論コストの経済合理性が大きな論点となっている。モデルの巨大化と高性能化に伴い、1リクエスト当たりの計算コストや電力消費は増大しており、利用量の拡大が必ずしも利益増に直結しない構造が顕在化している。近年見られるトークン単価の低下は利用者にとって有利である一方、基盤モデル提供側にとっては損益分岐点を押し下げる要因となり、新たな価格設定と収益モデルの確立が急務となっている。

第二に、計算資源の供給制約である。高性能GPUの競争に加え、データセンター運用に不可欠な電力供給や冷却インフラが、物理的な成長制約として顕在化している。これにより、資本力を持つ一部事業者への集中が進み、市場構造の安定化を阻害する可能性がある。

2. 技術的・ガバナンス的課題

技術面で生成AIの不確実性を管理するためのガバナンス体制が大きな課題となっている。

誤情報生成（ハルシネーション）は依然として完全な制御が困難であり、特に法務、医療、金融などのミッションクリティカルな領域では、生成結果を前提とした業務利用に慎重な姿勢が求められる。このため、生成AI単体に依存するのではなく、検証用の仕組みや人間によるレビューを組み合わせた運用設計が不可欠となっている。

また、学習データと知的財産の問題も深刻化している。高品質な学習データの枯渇が指摘される中、合成データ活用の拡大によるモデル性能の劣化リスクや、学習元コンテンツの著作権を巡る法的リスクが、基盤モデルの安定供給における不確実性要因となっている。



3.法制度・地政学的課題

生成AIを巡る法制度は国際的に整備が進みつつあり、事業者にとっては規制対応が重要な経営課題となっている。特に、リスク評価や説明責任を求める規制枠組みは、モデル設計や提供形態に直接的な影響を及ぼす可能性がある。

加えて、デジタル主権と地政学リスクの観点から、特定国・特定企業への技術依存に対する警戒感が高まっている。GPUの輸出規制や供給制限など、政治的要因が市場構造や技術供給を左右するリスクが顕在化しており、各国で独自の基盤技術確保を模索する動きが見られる。

4.組織・社会的課題

企業や社会への定着に向けては、技術そのものよりも人材や知識の問題（ボトルネック）が顕在化しつつある。

多くの組織で生成AIの導入自体は進んでいるものの、業務プロセスを「提から見直す」段階へと移行できていないケースが少なくない。AIを「活用」するための投資対効果を測定・説明できない状況が、一部で導入疲れや期待値調整を招いている。

さらに、AIによる意思決定の高度化の中で、責任の所在や倫理的バイアスへの懸念も拡大している。これらの問題は、法的整理だけでなく、社会的合意形成や利用者側のリテラシー向上と併せて取り組む必要があり、生成AIの実装における法的・制度的障壁となっている。

生成AI市場が今後も持続的に成長するためには、技術革新と並行して、これら複合的な課題への体系的な対応が不可欠である。



VIII. 日本市場の動向

Sample

日本の生成AI市場は、成長率という点では世界市場と同等、もしくはそれ以上の勢いを示している一方で、「市場規模」「利用の深さ」「用途構造」において独特の特徴を持つ中規模市場として位置づけられる。以下では、世界市場との比較を軸に、日本市場の現状と今後の方向性を整理する。

1.市場規模と世界に占める位置づけ

日本の生成AI市場は、近年急速な拡大局面に入っている。国内調査を総合すると、2024年度の市場規模は約4,000億円規模に達し、2028年には1兆円台後半、2030年前後には約1.7兆円規模に拡大すると見込まれている。これは2023年度比で10倍以上に相当し、日本の「市場」の中でも生成AIが中核的な成長分野になることを示している。

一方、世界市場では2030年前後に1,000億ドルから1兆ドル規模に拡大が予測されており、為替や市場定義の差異を考慮すると、日本市場が世界全体に占める割合は金額ベースで概ね2~4%程度と整理できる。すなわち、日本は「成長率は世界トップクラスだが、絶対規模では米国や中国に及ばない中規模市場」という位置づけにある。

2.世界市場と日本市場の特徴

日本市場の最大の特徴の一つは、個人利用と企業利用の間に大きなギャップが存在する点である。個人レベルでの生成AI利用率は主要国すべてで低水準にとどまっており、日常的な試行や自発的な活用が十分に広がっていない。

一方で、企業における生成AI導入はこの1~2年で急速に進展し、導入率は世界平均水準にまで接近している。特に大企業を中心に、業務効率化や生産性向上を目的とした導入が一気に進み、「個人は慎重、企業はキャッチアップ」という非対称な普及構造が形成されている点が、日本市場の大きな特徴である。

業界別に見ると、情報通信業や金融・保険業といった、もともとDXが進んでいた分野が生成AI導入を先行させている構図は、世界市場と共通している。一方で、日本特有の特徴として、製造業の位置づけが挙げられる。

製造業は現時点での導入率こそ中程度にとどまっているものの、設計、開発、品質管理、保全、需給計画といった領域で生成AIとの親和性が高く、極めて大きな活用ポテンシャルを有している。日本市場においては、この製造業への本格的な浸透が、今後の成長を左右する重要なドライバーになると見込まれる。

もう一つの特徴は、企業規模・業種間の導入格差が相対的に大きい点である。卸売、運輸、建設、医療・介護などの分野では、生成AIの導入率が低水準にとどまっており、先進的な大企業との二極化が進みつつある。

世界的にもAI導入の格差は存在するが、日本では特に「先行する大企業」と「慎重な中小企業・地域企業」とのギャップが大きく、これが経済全体におけるデジタルデバイド拡大のリスクとして指摘されている。

3.世界との比較から見た日本市場の強みと弱み

日本市場の強みとしては、製造業やインフラ分野を中心とした高品質なリアルデータの蓄積が挙げられる。これらのデータを生成AIと組み合わせることで、設計高度化や品質向上、現場業務の高度化といった分野で、独自の競争力を発揮できる可能性がある。

一方、弱みとしては、個人レベルでの試行不足、人材・組織面での制約、リスク回避的な企業文化などが指摘される。生成AIの活用がメール作成や資料補助といった限定的な用途にとどまりやすい点は、日本市場が抱える構造的な課題といえる。

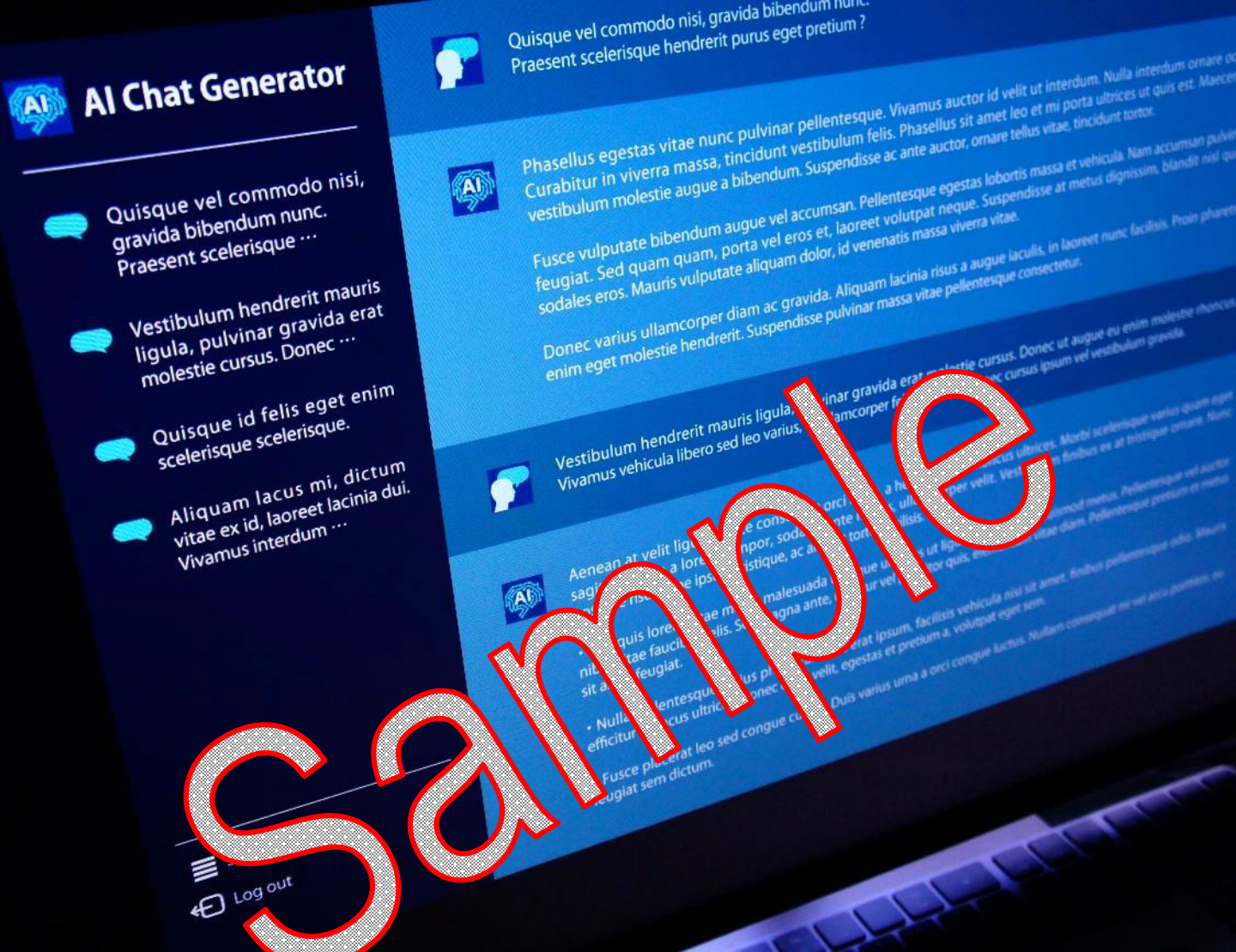
4.日本市場の今後の動向

今後、日本の生成AI市場は高い成長率を維持しながら、AIが産業の中核へ位置づけを強めていくと見込まれる。短期的にはオフィスワーク補助用途が引き続き中心となる一方で、中長期的には設計・開発、品質管理、需要予測、顧客対応といった業務プロセス全体への活用が進むかどうかが、市場の質的転換を左右する。

また、政府による人材育成、ガイドライン整備、基盤モデル開発支援などの政策が進展しており、これらが奏功すれば日本市場は海外モデルの真似る利用にとどまらず、特定領域に強みを持つ「領域特化型エコシステム」を形成できる可能性がある。

総じて、日本の生成AI市場は規模で世界全体の一部に過ぎないものの、成長余地と産業構造上のポテンシャルは大きい市場である。人材・組織・文化といった非技術的要因を克服できるかどうか、今後10年における日本の市場位置を決定づけることになる。





生成AI ～世界市場の現状と将来展望～

発行日:2026年3月 / 発行:株式会社SVPジャパン

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-38-9 宮前ビル2F

TEL:03-3249-0771 (代表)

HP:<https://www.svpjapan.com/>

本レポートの内容、画像等の一部もしくは全部の複製、無断での転載・複写をお断りいたします。

© SVP Japan All rights reserved.



s'il vous plaît
SVP JAPAN
株式会社SVPジャパン